

〈資料紹介〉 倉敷市所蔵「薄田泣菫文庫」

与謝野晶子自筆歌稿「湯あかりの後」「土ふみて」

加 藤 美 奈 子

はじめに——倉敷市所蔵「薄田泣菫文庫」について

平成二二年度より、本学吉備地方文化研究所事業の一環として、倉敷市所蔵「薄田泣菫文庫」（以下、「泣菫文庫」。旧稿で用いた「薄田泣菫関連資料」の正式名称として平成二三年度より市が呼称を統一した）の調査・撮影を継続的に実施している（拙稿「倉敷市所蔵『薄田泣菫関連資料』調査経過報告」（『吉備地方文化研究』第二一号（吉備地方文化研究所 二〇一一））。

本論叢前号掲載の拙稿「資料紹介」倉敷市所蔵「薄田泣菫関連資料」／与謝野晶子自筆歌稿「秋の薔薇」（『就実論叢』第四〇号（就実大学・就実短期大学 二〇一一））においては、「泣菫文庫」資料

の内、与謝野晶子自筆歌稿「秋の薔薇」（原稿用紙一枚）について、図版を掲載・翻刻し、初出・所収歌集等について解説を加えた。同歌稿の短歌一〇首は、「大阪毎日新聞」大正四年九月二六日に「秋の薔薇」と題して掲載された後、歌集『朱葉集』（金尾文淵堂 大正五年）に、初出一〇首の内、七首を収めている。拙稿では、歌稿・初出・歌集での異同を示した。

本稿では前稿に引き続き、資料調査時に「秋の薔薇」と重ねられていた原稿用紙二枚の与謝野晶子自筆歌稿の図版を掲載・翻刻し、初出・歌集との異同を確認する。なお、歌稿図版については、倉敷市（担当・文化振興課）の許諾を得て掲載している。

一 与謝野晶子自筆歌稿「湯あかりの後」「土ふみて」 解題

「泣菫文庫」所収の歌稿「湯あかりの後」は「大阪毎日新聞」掲載時の題により、「土ふみて」は歌稿一首目の初句から仮称した。

いずれも「秋の薔薇」と同様の原稿用紙を使用し、一マスに一文ずつ記入、一首を二行に収め、一枚につき一〇首の短歌が総ルビで書かれている。「秋の薔薇」同様、黒インクのペン書きで、二枚とも欄外に「与謝野晶子」と署名されているが、タイトルはいずれも示されていない。

用紙はそれぞれ縦約二六cm×横約三六cmの洋紙、「B4」サイズに相当し、青野の四〇〇字詰原稿用紙の様式で、「十ノ廿 松屋製」と左下欄外に印刷されている。

歌稿「湯あかりの後」は、大正二年七月二〇日付「大阪毎日新聞」に「湯あかりの後」と題され、一〇首の内、八首が掲載された。一〇八首目が、歌稿とおりの配列で示されているが、最後の二首は未掲載で、初出が不明である。歌稿・初出・歌集所収歌では、表記等に若干の異同が見られた。「大阪毎日新聞」掲載時の題は「湯あかりの後」だが、これは七首目の「ある夏の湯上りののち竹椽」にならびてありしかの従妹なし」により、紙面では「湯上り」とルビに濁点がふられている。

歌稿「土ふみて」は、十首の内、六首が「夏より秋へ」（金尾文淵堂 大正三年）に見出されるが、初出の詳細が現行の『全集』類

では詳らかではなく、歌集所収の六首についても、初出が示されていない。歌稿「土ふみて」は、歌集所収歌と比較すると、表記だけではなく、表現の異同が指摘される点でも興味深い。

「湯あかりの後」については二首、「土ふみて」については四首の与謝野晶子自筆による未公表短歌を含む可能性のある歌稿として注目される。

二 与謝野晶子自筆歌稿「土ふみて」「湯あかりの後」 図版・

翻刻・掲載紙

次頁に、**【図版1-1】**与謝野晶子自筆歌稿「湯あかりの後」、**【図版2】**与謝野晶子自筆歌稿「土ふみて」を掲げ、翻刻を示した（翻刻中の■は文字の修正箇所を示している）。**【図版1-1】**については、参考資料として掲載紙**【図版1-2】**「大阪毎日新聞」（大正二年七月二〇日付）「湯あかりの後」を掲げた。

なお、図版は、調査で撮影された画像データの周囲を省き、筆跡を明確にするため、明度等に若干の加工を施している。

「大阪毎日新聞」紙面は、国立国会図書館所蔵データの複写によつた。

与謝野晶子 自筆歌稿「湯あかりの後」翻刻

〔欄外〕与謝野晶子

和泉なるふるさとの人おのれをば忘れぬこと

の少しうるさし

本を読み流行の衣を欲しがりしわろき娘もお

もふ故郷

物干へ帆を見に出でし七八つの男姿のわれを

おもひぬ

わが叔父の泳ぐ間に四五人の新地の人のもて

あそぶ砂

まだ見ざる東京の人思ひたるある別荘の石垣

のもと

二十の日ある病して死ぬらんと胸をいだきし

二つの手かな

ある夏の湯上りののち竹縁にならびてありし

かの従妹なし

天の川見ればほのかにももの香の空より降る

と思ふものかな

わが世をばうちまどふことしきりにも續きし

頃の■■おぞましき日記

生れたる日をば悲しと何の云ふ一萬日の時の

語れる

〔図版 1-2〕

「大阪毎日新聞」(大正二年七月二〇日付)「湯あかりの後」

湯あかりの後

與謝野晶子

和泉なる故郷の人おのれをば忘れぬ事

の少しうるさし

本を読み流行の衣を欲しがりし悪き娘

もおもふ故郷

物干へ帆を見に出でし七八つの男姿の

われを思ひぬ

わが叔父の泳ぐ間に四五人の新地の人

のもてあそぶ砂

まだ見ざる東京の人思ひたるある別荘

の石垣のもと

二十の日ある病して死ぬらんと胸をい

だきし二つの手かな

ある夏の湯上りののち竹縁にならびて

ありしかの従妹なし

天の川見れば仄にも、香の空より降ると思ふものかな

与謝野晶子 自筆歌稿「土ふみて」翻刻

〔欄外〕与謝野晶子

土ふみて草履のしめるこちさへ嬉しき夏と
なりにけるかな

縁にいで瓜をくらひて茶すすりぬ貧しき家も
夏はよろしも

君と行く四谷見附の土手の草尺ほどとなり雨
になびく日

いとさむく悲しきままに明るみへすべりいる
なりわが朝の夢

砂踏むを焼けむとそしり網小屋の蔭をあゆめ
り物思ふ人

髪よりも静かなるなし夕ぐれの山の色よりみ
づうみよりも

文かくを四五日ののちおこたりぬ味気なきか
なかかるおもひで

あとつけて走る船こそをかしけれ君とわれと
の川道遙に

こちたくも本をおきたる戸棚より寂しさのわ
くわれの部屋かな

街行けば涙くまるるおもひでの必ずすわきぬま
づしきがため

三 与謝野晶子自筆歌稿「湯あかりの後」「土ふみて」解説

「湯あかりの後」一〇首の内二首、「土ふみて」一〇首の内六首が
所収されている『夏より秋へ』は、大正三年一月、晶子三六歳の詩
歌集である。挿画は藤島武二、扉には「文学博士上田敏先生に献ず。」
とあり、「上の巻」に短歌五一〇首、「中の巻」に短歌二五七首、「下
の巻」は一〇二編の詩が収められている（逸見久美「解題」（『定本
与謝野晶子全集』第三卷（講談社 昭和五五年））。「下の巻」の巻
頭は、「青鞵」創刊号（明治四四年）に「そぞろごと」と題して掲
載された詩「山の動く日来る」である。

「湯あかりの後」が新聞紙上に掲載された大正二年には、前年の
渡欧までの経緯を描いた長編小説「明るみへ」を「東京朝日新聞」
に六月から九月まで一〇〇回にわたって連載している。「土ふみて」
の詠まれた時期は確定出来ないが、『夏より秋へ』所収歌を確認す
ると、前後に配列された歌の初出が、概ね大正二年六〇八月頃であ
り、「土ふみて」は、「湯あかりの後」と近い時期に詠まれたことが
推測される。

以下、歌稿「湯あかりの後」「土ふみて」について、初出・歌集『夏
より秋へ』掲載歌との異同を示す。

底本は、『定本与謝野晶子全集』一―二〇巻（講談社 昭和五四
―五六年）によった（以下、『全集』）。

傍線は歌稿との表現・表記の異同を引用者が示したものである。

○『夏より秋へ』所収歌　・『初出』掲載の歌集未収録歌

●『初出』未掲載の歌集未収録歌

ゴシック体で、自筆歌稿「湯あかりの後」「土ふみて」からの翻刻を示した。

〔初出〕—「湯あかりの後」〔大阪毎日新聞〕大正二年七月二〇日

〔歌集〕—『夏より秋へ』（大正三年一月）

〔拾遺（大正二年）〕—〔初出〕掲載、〔歌集〕未収録の作品。『全集』の「明治四十五年・大正元年～六年（拾遺）」の内、「大正二年」の「拾遺」によった。「拾遺」は前掲〔初出〕の「大阪毎日新聞」によるため本文は省略した。

歌番号は、「歌集」・〔拾遺（大正二年）〕ともに『全集』によった。

与謝野晶子　自筆歌稿「湯あかりの後」

・和泉なるふるさとの人おのれをば忘れぬこと少しうるさし

〔初出〕和泉なる故郷の人おのれをば忘れぬ事の少しうるさし

〔拾遺（大正二年）〕 297

○本を読み流行の衣を欲しがりしわろき娘もおもふ故郷

〔初出〕本を読み流行の衣を欲しかりし悪き娘もおもふ故郷

〔歌集〕 235 本を読み流行の衣を欲しがりし娘も思ふふるさとのこと

○物干へ帆を見に出でし七八つの男姿のわれをおもひぬ

〔初出〕物干へ帆を見に出でし七八つの男姿のわれを思ひぬ

〔歌集〕 209 ものほしへ帆を見に出でし七八歳の男すがたの我を思

ひぬ

〔歌集〕 427 物干へ帆を見にいでし七八歳の男姿のわれをおもひぬ

同歌は『夏より秋へ』に、重複して所収されている。

少女時代「男姿」をしていたことを詠んだ歌に「十二まで男姿をしてありしわれとは君に知らせずもがな」（『春泥集』〔明治四四年〕113）がある。「和泉なるふるさと」を詠んだ冒頭歌より三首、「故郷」との関わりを詠んだ歌が並ぶ。

・わが叔父の泳ぐ間に四五人の新地の人のもてあそぶ砂

〔初出〕わが叔父の泳ぐ間に四五人の新地の人のもてあそぶ砂

〔拾遺（大正二年）〕 298

・まだ見ざる東京の人思ひたるある別荘の石垣のもと

〔初出〕まだ見ざる東京の人思ひたるある別荘の石垣のもと

〔拾遺（大正二年）〕 299

・二十の日ある病して死ぬらんと胸をいだし二つの手かな

〔初出〕 二十の日ある病して死ぬらんと胸をいだし二つの手かな

〔拾遺（大正二年）〕 300

・ある夏の湯上りのち竹縁にならびてありしかの■従妹なし

〔初出〕 ある夏の湯上りのち竹縁にならびてありしかの従妹なし

〔拾遺（大正二年）〕 301

・天の川見ればほのかにもの香の空より降ると思ふものかな

〔初出〕 天の川見ればほのかにもの香の空より降ると思ふものかな

〔拾遺（大正二年）〕 302

●わが世をばうちまどふことしきりにも續きし頃の■おぞましき日記

〔初出〕 未掲載 〔歌集〕 未収録

〔頃の〕の下、ニマス修正し、「おぞま」と書き入れている。

●生れたる日をば悲しと何の云ふ一萬日の時の語れる

〔初出〕 未掲載 〔歌集〕 未収録

「一萬日」を詠んだ歌に、「生れ来て一萬日の日を見つたは自らをたのみかねつも」〔青海波〕（明治四五年）164がある。

与謝野晶子 自筆歌稿「土ふみて」

○土ふみて草履のしめるこちさへ嬉しき夏となりにけるかな

〔初出〕 未掲載

〔歌集〕 403 草履みて草履のしめるこちさへ嬉しき夏となりにけるかな

●縁にいで瓜をくらひて茶すすりぬ貧しき家も夏はよろしも

〔初出〕 未掲載 〔歌集〕 未収録

○君と行く四谷見附の土手の草尺ほどとなり雨になびく日

〔初出〕 未掲載

〔歌集〕 402 君と行く四谷見附の土手の草尺ほどとなり小糠雨ふる

○いとさむく悲しきままに明るみへすべりいるなりわが朝の■夢

〔初出〕 未掲載

〔歌集〕 48 いと寒くかなしきままに明るみへすべり入るなり我が朝の夢

●砂踏むを焼くむとそしり網小屋の蔭をあゆめり物思ふ人

〔初出〕 未掲載 〔歌集〕 未収録

●髪よりも静かなるなし夕ぐれの山の色よりもみづうみよりも

〔初出〕 未掲載 〔歌集〕 未収録

○文かくを四五日ののちおこたりぬ味気なきかなかるおもひで

〔初出〕 未掲載

〔歌集〕 405 文書くを四五日ののち怠りぬあぢきなきかなかるおもひで

○あとつけて走る船こそをかしけれ君とわれとの川道遙に

〔初出〕 未掲載

〔歌集〕 596 あとつけて走る船こそをかしけれ君とわれとの川道遙に

○こちたくも本をおきたる戸棚より寂しさのわくわれの部屋かな

〔初出〕 未掲載

〔歌集〕 404 こちたくも本を置きたる戸棚よりさびしさの湧く黄昏の部屋

●街行けば涙ぐまるるおもひでの必ずわきぬまつしぎがため

〔初出〕 未掲載 〔歌集〕 未収録

おわりに——六首が未公表短歌の可能性

以上、倉敷市所蔵「薄田泣菫文庫」の内、与謝野晶子自筆歌稿「湯あかりの後」「土ふみて」を翻刻・紹介した。

歌稿「湯あかりの後」一〇首は、薄田泣菫が学芸部に所属した「大阪毎日新聞」紙上に八首が掲載され、内二首が『夏より秋へ』に所収されたが、残る二首については、歌集にも未収録で、初出についても現段階では見出せない。

歌稿「土ふみて」一〇首は、「湯あかりの後」と同時期に詠まれた作品と推測されるものの、初出は不明で、内六首が『夏より秋へ』に所収されており、幾つかの表現の異同が見出される。

「湯あかりの後」では、歌集のみならず、原稿と初出の「大阪毎日新聞」掲載歌との間にも、表記等の異同が見られた。

特筆すべきは、「湯あかりの後」の「大阪毎日新聞」未掲載・歌集未収録の二首、「土ふみて」の歌集未収録の四首で、これらの作品が、未発表のまま自筆歌稿のみ泣菫の元に残された経緯は詳らかではなく、同歌や類歌の他紙・誌への掲載の可能性も考慮されるが、晶子自筆の未公表短歌である可能性が高いことを指摘しておきたい。

末筆ながら、「泣菫文庫」を担当されている倉敷市文化振興課、同課主任・秋山剛氏、および、長年に亘り『泣菫小伝一〇九』（薄

田泣董顕彰会（平成一四―二二年）を刊行されるなど、泣董生家の
ある倉敷市連島から精力的に泣董顕彰事業に尽力、「泣董文庫」に
ついても常日頃よりご助言頂いている「薄田泣董顕彰会」事務局・
三宅昭三氏に心より感謝申し上げます。